

書評・紹介

John Bongaarts, Thomas Burch and Kenneth Wachter (eds.)
Family Demography, Methods and Its Applications

Clarendon Press, Oxford, 1987, 365pp.

本書は1982年以降 I U S S P が主催した家族人口学に関する会議に提出された論文をまとめたものであり、現在の家族人口学における分析手法の最前線の成果を示すものである。

全体は7部18章からなる。第I部は序説であり、著名な数理人口学者のN. Keyfitzにより本書の内容に即した簡単な展望がおこなわれている。

第II部は計測と推計と題される。そのうちの一つはT. Burch等による世帯に関する標準化と要素分解の手法を使った分析である。もう一つはS. Prestonによる安定人口理論を利用した指標による配偶関係の分析である。

第III部は家族ライフサイクル論である。C. Höhnによる従来の家族ライフサイクル概念の批判的検討と新たなライフコース概念登場の説明は明快である。G. Feichtingerによる計測論は、結婚、死別、離別や出生など広範囲にわたるが、寡婦期間の正しい計算方法の提起なども有益である。N. Ryderは、ライフサイクル変数について一定の仮定を設定した人口のマクロモデル分析を論じる。

第IV部は多相生命表である。多相生命表multistate life tableは近年急速に発達をみた生命表形式であり、主たる開発者の一人であるF. Willkensによるその理論的説明は比較的理解しやすい。T. Espenshadeは、その応用として、アメリカ女性コウホートについて結婚、別居、離婚、死別、再婚別の滞在年数やそれぞれの状態別割合の分析をおこなっている。またS. Hofferthは、離婚・再婚などの多いアメリカにおける親の配偶関係の変化と子供がどちらの親と一緒に暮らすかを多相生命表を使って分析している。J. Bongaartsは、配偶関係別出生児数別割合、家族類型別割合やライフコースを通じてどのような家族類型を経験するかといった分析を同じく多相生命表を用いておこなっている。

第V部は家族関係モデルとマイクロ・シミュレーションである。K. Wachterは、家族・世帯の変動を再現・分析するための手段としてのマイクロ・シミュレーションについて、事例にふれながらその有用性と意義を述べる。J. Reevesの論文は、家族のマイクロ・シミュレーションをアメリカ人口に適用した結果の報告である。J. Smithは、イギリスの前近代と近代の人口についてシミュレーションを適用した結果、それぞれの時代の平均的な個人にとって年齢の段階別にどのような親族関係が生じ、親族の種類別にどれだけの人数との関わりが生まれるかの検討をおこなっている。T. Pullumの論文は、親族関係と家族に関する数学的モデルのレビューである。

第VI部は、世帯数推計についてのものである。世帯数推計に最も多く用いられている世帯主率法の主要な開発者の一人である河野稠果は、世帯主率法の経緯と利用形態を論じ、規模別世帯数推計の改良を紹介し、また世帯主の生命表を作成している。J. Pitkinは、世帯における世帯主率と同居している非世帯主の成人の割合には一定の関係があり、親子二世帯間の人口の対応関係や家族関係による影響を受けることに着目した世帯主率法の改良を論じている。I. Holmbergは、世帯規模別の推移確率を使った世帯数の推計を紹介している。

第VII部は家族人口学の発展方向と題され、N. Ryderによる家族における夫婦としての側面、血族・親族としての側面と居住単位としての側面の三つの側面に即し本書の論文を位置付けた家族人口学の展望である。

本書に取められた家族人口学の成果は、非常に広範囲にわたる。評者の個人的関心からいえば、第III部の家族ライフサイクル論と第IV部の多相生命表の理論は非常に興味深く有益であった。いずれにしても家族の人口学的分析を志すものにとって、座右に置いて参照すべきテキストとして、本書の意義は真に大きいと思われる。

(渡邊吉利)